（１１）県立中村中学校

学　　校　　長　　楠瀬　誠悟
校内研究代表者　　今津　里香

１．研究主題

地域からの熱い思いに応え、高い志を持ち、中高一貫の６年間を熱く語れる魅力ある生徒の育成
～生徒が思考を深め、自分の考えや思いを表現する発問・活動の研究～

２．主題設定の理由

本校生徒は、通学区域が広範囲で、多くの小学校から集まった集団である。素直で優しい生徒が多く、落ち着いた学校生活を送っている。一方で、仲間との人間関係を築くことを苦手としている生徒が増加傾向にあり、教育活動全体を通じて、なかまづくりを意図的計画的に仕組む必要がある。しかし昨年度末からの新型コロナウィルス感染拡大予防対策に係って大幅な予定変更になり、構成的グループエンカウンターなどが十分にできず、臨機応変的になかまづくりに取り組むような状況になってしまった。学習面では、基礎的な力は一定身についているものの、自主性に弱さがあり、高校入試がないことで、学年が上がるにつれ学習意欲が低下する傾向が見られる。家庭学習時間調査においても、学習時間に減少傾向がみられ、以前から大きな課題となっている。今年度の学校評価アンケートでも「目標をもって学校生活を送っている」において肯定的回答が７６．８％であった。２割以上の生徒が目標を持てないでいる現状がある。

昨年度の全国学力状況調査の結果より、国語、数学、英語すべてにおいて、全国平均を上回っているものの（国語では１０．２、数学では１７．２、英語では６ポイント上回る）、記述問題の正答率の伸び悩みが共通して課題として挙げられ、目的や課題に応じて情報を活用し、論理的にまとめたり伝えたりする力に弱さがある。高知県学力状況調査においても同じ傾向が見られる。

これらの現状から、生徒の心の変容を逃さない取り組みを基本に、「生徒指導の３機能を働かせた授業づくり（自己存在感・共感的な人間関係・自己決定）」を進め、学ぶ意欲や挑戦する気持ちを持ち続け、自分の考えや思いを自分の言葉で他者に伝えることのできる生徒の育成を目指したい。

３．研究の進め方と方法

本校は中高一貫教育校であるため、校内研究は中高合同で行っている部分が多い。また、研修計画も分掌を中心に立案し研究を進めている。中学校独自の会としては、中学校確認会とサポート委員会をそれぞれ月に１回、中学校校内研修日を定期的に設定している。時間の確保が十分とはいえないが、限られた時間の中で、中学校独自の様々な課題について研究している。

☆＜中高合同＞

中高合同校内研修
・進路指導部・・・進路、学習関係全般
・サポート部、生徒指導部・・・生徒の心のケア、生徒指導関係全般
・研修部・・・ピアチューターや課題研究、アクティブラーニング
・総務部・・・防災関係全般
・教科部会・・・週１回の中高合同教科部会

☆＜中学校独自＞

〇中学確認会・・・月１回
〇中学サポート委員会・・・月１回
〇中学校校内研修

４．具体的な取り組み

☆中学校、高校合同の取り組み

＜進路指導部・・学力向上のための組織的な取り組み＞

①毎週月曜日実施の確認テスト

国語・数学・英語の順に毎週実施（不合格者は再テスト）

②家庭学習時間調査　（年３回実施）

生徒の家庭での学習の状況を定期的に把握し、日々の指導に生かす。また、保護者への啓発と協力の要請に活用する。

③高校教員との異教科間の相互授業参観

校種と教科を超えた相互授業参観を実施し、相互に評価し合う。高校での授業の様子を見ることができると同時に、県中卒業生の成長を知ることができる。

参観の視点は以下の６点

1　学習の目標（めあて）を明確に示し、生徒と共有できている。
2　意欲的に授業に取り組もうとする生徒の姿がある。
3　生徒の興味や知的関心を引き出す発問・指示ができている。
4　授業のねらいに応じた学習形態（ペアやグループなど）の工夫ができている。
5　生徒が他の生徒と協調・協力して活動する場面を設定できている。
6　何ができるようになったかを、生徒が振り返る場面を設定できている。

④夏季補習

加力の必要な生徒に焦点を当てた補充学習を実施する。

⑤学力検討会

学期に１回実施。教科部会で分析したのち、全教職員で共有する。

協議を通して、学力の現状と課題を把握し、実現可能な新たな数値目標や取り組みを設定する。

＜教科部会＞

・中高連携教科部会の充実

週１回の教科部会は時間割の中に組み入れて、中高の連携と授業形態の系統性を確認する。

＜サポート部＞

・Ｑ－Ｕアンケート（年２回）と学校生活アンケート（年５回）の実施と実施後の迅速なアンケート集計とその対応

学校生活アンケート実施日に即日集計し、その日のうちに気になる生徒に面談等の対応

・いじめ検討委員会（随時）の開催

＜研修部＞　深く考え、分かりやすく表現できる生徒の育成

・中高６年間を見通したキャリアプラン、総合の見直し

・ピアチューター

中学１年生と高校生との異校種間交流

☆中学校独自の取り組み

・サポート委員会（月１回）サポートの必要な生徒の情報共有と支援の在り方を考える。

・中学校確認会

・生活日誌の点検とコメント記入の徹底

生徒の心の変化を毎日読み取る

担任、副担任で半数ずつの生徒の日誌を交代で点検し、生徒の変容を逃さない。

日々の生活状態の把握に努める。

・毎日の宿題とその点検

自主学習と各教科の宿題の量を調整し、全教員が日々の宿題のトータル量を把握する。

・専門委員会の充実

専門委員会を月に１回設定している。翌月の専門委員会までに、活動日を１～２回設け各委員会の自主的な活動を通して、委員会活動の活性化を図る。

・道徳や総合的な学習の計画の見直し

総合については、中学校の３年間、さらに高校３年間を含む６年間を系統だてた「探究学習」の計画を進める。

・各種研修

６月１５日「生徒理解」についての研修　濱川博子スパーバイザー

８月５日　特別な教科「道徳」の評価の仕方　高知大学教職大学院森有希准教授

１２月８日　道徳授業研　高知大学教職大学院森有希准教授

１月８日　G Suite 研修

２月６日　G Suite 研修

５．今年度の課題と成果

＜各種アンケート結果＞

◇学校評価アンケート結果

・学校での生活に満足している（一昨年）　91.4% ⇒（昨年）96.4% ⇒ 94.3%

・目標をもって学校生活を送っている　82.0%　⇒　86.3%⇒ 76.8%

・分かりやすい授業が多い　85.2%　⇒　87.3%　⇒ 89.9%

・教材や教え方を工夫している教職員が多い　83.7%　⇒　89.5%　⇒　88.7%

◇家庭学習時間調査（１１月）

平日の家庭学習時間

１年　７９分（昨年）⇒７３分（今年１１月）、　２年　８０分　⇒　６５分

３年　６１分 ⇒　６６分

＜成果＞

○アンケート結果より、「学校生活に満足している」、「目標を持った学校生活を送っている」と感じている生徒の割合が、今年度も９０％を超えている。

○アンケート結果より、「分かりやすい授業が多い」、「教材や教え方を工夫している教職員が多い」と回答する生徒が９０％近くになっている。

○生徒の心の状態をみとるタイミングの迅速化が図れた。

・生活日誌等の他、個人面談についても主・副が共に関わることで、生徒の心の変化を多角的に捉え、素早く対応することにつなげることができた。

・生活アンケートは当日中に集計し、その日のうちに心配な生徒への聞き取りを行うということを徹底したことで、迅速な対応ができた。

・Ｑ－Ｕアンケートの結果をふまえ、各学年と SC とで検討会をもち、専門的なアドバイスのもと、対応策について話し合えた。要支援や不満足群の生徒についてはサポート委員会を活用し、全体で共通理解を図り対応していった。

○中高異教科間の相互授業参観により、それぞれの良さを自分の授業に還元することができた。

＜課題＞

●家庭学習時間が目標時間の９０分に到達することができなかった。

●主体的に学ぶ意欲のある生徒とそうでない生徒の格差が開いている。さらなる学習基盤づくりやキャリア学習の充実が必要である。

●各種の会が多く、中学校独自の校内研修の時間の確保が難しい。

・月１回実施の会

運営委員会、　中高合同定例職員会、　サポート委員会、　中学校確認会

・学期に１回程度実施の会

学力検討会、中学校校内研修会、中高合同校内研修会、成績会議

●高校教員との異教科間の相互授業参観は実施しているが、中学校独自の合同授業研の時間確保が難しく、中学校校内研修としての授業研ができていない。

以上の成果と課題を踏まえ、中高連携のもと校内研修体制を構築していきたいと考えている。